

接続助詞「が」の機能分析

——文法学習の観点から——

山下 直

0. はじめに

接続助詞「が」には、さまざまな用法があり、①～④はそのうちのほんの一例である。

①ふっとキッチンを見るとフライ鍋とフードの間を火が覆っています。夫と二人で駆けつけ、消火作業。…(中略)…テレビで見知っていた対策として、野菜くずを投げ込みましたがいっこうに火は弱まりません。(「こんにちは」⁽¹⁾ 2002.9)

②今回ご紹介する日本料理のお店「音羽楼」は、まさにその葉山御用邸のすぐ近く。オープンは'98年ですが、建物自体は昭和初期の建築。(「こんにちは」2002.9)

③だいたい塔のような建築は、俗界とは違う空間を表しています。遊郭なども多層ですが、あそこも別世界で、日常の向こう側の空間です。(「こんにちは」2002.9)

④「千と千尋の神隠し」のアカデミー賞長編アニメ部門ノミネートと共に、短編アニメ部門では山村浩二氏の「頭山」が候補になり、改めて日本アニメへの注目が集まっている。来月23日の授賞発表に期待したいが、今やアニメは世界に通用する日本文化の切り札となった。(毎日新聞 2003.2.24 社説)

接続助詞「が」の用法分析は、記述した意味を個々の研究者の観点で分類する方法で主に行われている。そのため、それぞれの研究者によって分類のしかたがさまざまであり、接続助詞「が」が文章や会話においてどのような機能を果たしているのか、という問題については整理されているとは言えない。また、接続助詞「が」についての研究は、日本語教育の立場からの分析が多く、その成果をそのまま国語教育に生かすことも難しい。

そこで本稿では、国語教育における文法学習材という観点から、接続助詞「が」の機能を分析することを試みる。その結果、接続助詞「が」がすぐれた文法学習材となり得る可能性を持っていることを明らかにする。

以下、接続助詞「が」の意味については、便宜的に大きく二つに分けて、①②のようなタイプを「逆接」、③④のようなタイプを「前置き」と呼ぶことにする⁽²⁾。

1. 用法間の連続性

永田・大浜（2001）では、接続助詞「が」に関する先行研究には特定の用法を扱うものが多いという反省に基づいて、用法間の関係に積極的に着目し「これ x が書いた本だけど、すごく面白いよ。」という例を挙げて、逆接と前置きの連続性を指摘している。

「これ x が書いた本だけど」が「x が書く本は面白くない」ということが話題となっている場合には逆接用法として、そのようなことが話題となっておらず、また x という作家の名前も初めて聞くような場合には前置き用法としてそれぞれ認識されるのではないだろうか。このことはケドの各用法と表現形式との関係が予め決められた固定的なものではなく、（中略）文脈的要素と関わりながら解釈の過程で決定されるものであることを示唆している。

「文脈的要素と関わりながら解釈の過程で決定される」とは、言い換えれば、「x が書く本は面白くない」ということが話題になっている場合には、聞き手（読み手）は「けど」が逆接として機能すると予測し、x という作家の名前も初めて聞くような場合には、聞き手（読み手）は「けど」が前置きとして機能すると予測するということである。

つまり、永田・大浜（2001）では、文脈的要素が「けど」がどの用法として機能するのかを聞き手（読み手）に予測させる、ということを示しているわけである。この指摘は、接続助詞「が」の分類が恣意的になりがちであるという、従来の問題点を解消しようとする試みとして注目される。しかしながら、文脈的要素と聞き手（読み手）の予測とのかかわりについては、まだ考察の余地があり、そのことについては次節で述べる⁹⁾。

2. 意味・用法の分類の限界

例えば 0. で②を逆接としたが、お店の紹介としては、

⑤今回ご紹介する日本料理のお店「音羽楼」は、まさにその葉山御用邸のすぐ近く。オープンは'98年ですが、おすすめは海鮮料理のコース。

という文であっても、特におかしな点はない。この場合は「オープンは'98年ですが」の「が」は前置き用法である。このことは、「オープンは'98年ですが」という表現形式が「が」の用法を決定する要因となっていないことを示しており、各用法と表現形式との関係が固定的ではないという永田・大浜（2001）の指摘と一致している。

ところが、②と⑤の場合では「オープンは'98年ですが」の「が」について、逆接か前置きかを予測する手がかりは文脈のどこにもない¹⁰⁾。

②や⑤の「が」が逆接なのか前置きなのかは、後からふり返って初めて確認できることである。ところが、通常の会話や文章で、聞き手（読み手）が後から振り返って意味を確認しなくてはコ

コミュニケーションが成立しない、などということはない。これらの例は、接続助詞「が」が逆接の指標なのか、前置きの指標なのか明確でなくても、コミュニケーションには大きな支障がないことを示していると言える。つまり、接続助詞「が」は、後に続く部分との論理的関係を聞き手（読み手）に予測させる語として用いられていないことが推測される。

さらに、接続助詞「が」には文脈に一定の手がかりがあるような場合でも、逆接なのか前置きなのか判断に迷う場合が少なくない。

- ⑥日本には基本的に多層建築がないんですよ。日本人は空間を組み立てるとき、平面の分割を基本にしています。…(中略)…天守閣も西洋の影響でつくられるようになったものですし、五重塔も海外から入ったものです。金閣寺や銀閣寺も多層ですが、あれは平面を積み重ねたもの。異質な様式の空間を積み重ねているだけです。(「こんにちは」2002.9)

「日本には多層建築がない」ということを明確な前提として話が進んでいると考えれば、「金閣寺や銀閣寺も多層ですが」の「が」は、逆接の予測を促すことになる。「金閣寺や銀閣寺も多層です。しかし、あれは平面を積み重ねたもの。」と言い換えられることから、この「が」が逆接として機能していることを否定する要素はないように思われる。

しかし、「金閣寺や銀閣寺も多層である（多層に見える）」ということ、読み手に対して単に確認しているに過ぎないととらえても、それを誤りとする根拠を指摘することは難しい。そうになると、この「が」は前置き用法ということになる。⑥においても、接続助詞「が」を逆接か前置きか判別することは、コミュニケーションの成立に影響しないことを示している。

永田・大浜（2001）の例では、逆接か前置きのどちらかの予測に偏り易い文脈が想定されていたために、文脈によって「が」の意味・用法を予測しながらコミュニケーションが行われているかのように見えたにすぎない。実際には接続助詞「が」を逆接か前置きか判別、予測することは、コミュニケーションの成立とは深く関わっていないのである。

このような例から、我々は、後に続く内容との論理的な関係や、話の流れがどのように変わるのかを聞き手（読み手）に示す指標として、接続助詞「が」を用いていないということが推測できる。以下、この推測について検証を試みる。

3. 制約のない「が」

- ⑦フランスワインの産地と言えば、ボルドーとブルゴーニュが思い浮かぶが、

の後にはどのような内容を続けることが可能だろうか。

- ⑧フランスワインの産地と言えば、ボルドーとブルゴーニュが思い浮かぶが、この二つの地域はフランスだけでなく世界中のワインを代表する産地でもある。

⑨フランスワインの産地と言え、ボルドーとブルゴーニュが思い浮かぶが、コストパフォー
マンスのことを考えれば、ローヌやプロヴァンスこそがフランスワインの代表的な産地とも
言える。

⑩フランスワインの産地と言え、ボルドーとブルゴーニュが思い浮かぶが、イタリアではト
スカーナ、ピエモンテあたりが有名だ。

⑪フランスワインの産地と言え、ボルドーとブルゴーニュが思い浮かぶが、チリや南アフリ
カでもそれに負けないくらい質の高いワインが生産されている。

⑧～⑪の波線部を見比べてみても、共通の特徴を見出すことは難しい。⑦の後にどのような内容
を続けることができるのかということに対する制約はきわめて小さく、事実上制約はないといっ
ても差し支えないだろう。これは⑦にかぎったことではない。例えば先の①③④も

①'野菜くずを投げ込みましたが、期待以上の効果を発揮し、火はすぐに消えました。

③'遊郭なども多層ですが、俗界と違うというのは高貴であることも意味するので、この場合
はちょっと別です。

④'来月23日の授賞発表に期待したいが、日本のアニメブームに対する懸念の声があること
も忘れないようにしたい。

①は逆接用法だが①'は前置き用法、③は前置き用法だが③'は逆接用法、④は前置き用法だが④'
は逆接用法になっている。しかも、これらは①③④と同じ文脈でも十分に成り立つ⁹⁾。このよう
なことから、接続助詞「が」の後に続く内容に対する制約はほとんどないことがわかる。

後に続く内容を制約しない語が、読み手（聞き手）にとって、予測の指標として機能し得るは
ずはなく、2.における推測は妥当なものであると考えてよいことになる。

4. 〈区切り〉としての「が」

4-1 「が」の機能について考える観点

接続助詞「が」は、後に続く内容に対してほとんど制約を持たず、読み手（聞き手）の予測の
指標として機能していないことが分かった。接続助詞「が」の用法について、前置きか逆接かを
判別することは、コミュニケーションの成立および効率化にはほとんど影響がないのである。だ
から、国語科の学習において、接続助詞「が」に前置き用法や逆接用法があることを学習しても、
学習者の言語の運用に対する認識を深めることにそれほどの効果があるとは思えない。このよう
なことからも、接続助詞「が」はもっと別の観点から機能を分析する必要があると言える。では、
どのような観点で接続助詞「が」の機能をとらえればよいのだろうか。

接続助詞「が」は、たとえ後に続く内容に対する制約がほとんどなかろうとも、その名称に
「接続」という語が冠されていることから考えて、なんらかの形で前後の論理的関係を示すことが

機能の一つであるという考えもあるかもしれない。しかしながら、論理的関係を示すという面から見ると、「が」を用いる必然性を明確に説明できない例がある。たとえば、

⑫「各家庭に流れるテレビジョンの影響するところ、国民生活全体の上に革命的とも申すべき大きな働きを持ちます。」——1953年2月1日、NHKの古垣鉄郎会長は、テレビ初放送でこう言った。それから半世紀、「革命」の規模は、古垣会長の想像をはるかに超えたものだったろう。

お茶の間もいつしか「リビング」へ様変わりしたが、そこにはいつもテレビが置かれ、新しい生活様式、新しい商品、新しい感覚と思考を次から次へ家庭に送り込んだのだ。

(毎日新聞 2003.2.1 社説)

下線部を以下のように「が」を用いない文にしても、伝わる情報はほとんど変わらない。

⑬お茶の間もいつしか「リビング」へ様変わりし(て)、そこにはいつもテレビが置かれ、新しい生活様式、新しい商品、新しい感覚と思考を次から次へ家庭に送り込んだのだ。

⑬の例から明らかなように、⑫の下線部では「が」を用いずに、接続助詞「て」または接続助詞を用いない形に言い換えても、読み手に伝わる情報はほとんど変わらない。にもかかわらず「が」を用いるのはなぜなのか。⑫の下線部と⑬との間には、いったいどのような違いがあるのか。この違いを明らかにすることが、接続助詞「が」の機能を明らかにすることにつながるのである。

4-2 情報の軽重を示す「が」

まず、⑫のように「が」を用いなくても、伝わる情報にほとんど変化が見られないような例として⑭⑮⑯⑰を見てみよう。

⑭『北の国』からのすべての作品の中で、僕は『'87初恋』と『'89帰郷』が好き。この2作は純と螢の青春編ですが、シリーズを通して見ていなくても楽しめると思います。

(朝日新聞 2002.9.3 朝刊20面「北の国から」全面広告のインタビュー記事)

⑮この2作は純と螢の青春編で(あり)、シリーズを通して見ていなくても楽しめると思います。

⑯とくに『'89帰郷』では、純がお守りのように大切にしていたお札を盗られてしまう話が出てきますが、“親子の絆”のようなお札を、必死になって探したり、取り戻すために闘う。そんな

な純の姿に、富良野を離れてはじめて強く「家族」を意識した純の父親への思いの深さが象徴的に表れているようで……

(朝日新聞 2002.9.3 朝刊20面「北の国から」全面広告のインタビュー記事)

⑮'とくに『89帰郷』では、純がお守りのように大切にしていたお札を盗られてしまう話が出てきて，“親子の絆”のようなお札を、必死になって探したり、取り戻すために闘う。

⑭⑮は、テレビドラマ『北の国から』の最終回を前に、番組の広告として新聞に掲載された、俳優吉岡秀隆のインタビュー記事から抜粋したものである。下線部の「が」について、「が」節と後に続く内容がどのような関係になっているのかという観点で用法を分類しても、「が」の機能を明らかにするためにはさほど有益ではないことについては、すでに述べてきた通りである。

ここでは、小出(1984)や亀田(1998)で指摘されている情報の軽重という観点に注目したいと思う。小出(1984)では、

⑯1912年というのは明治の終わった年ですが、この年に私の姉は生まれました。

⑰1912年と言うのは明治の終わった年です。この年に私の姉は生まれました。

を対比し、次のように述べている^⑱。

(⑰のように：山下注)文連続が続いていくと、聞き手の負担は非常に大きくなっていくだろう。それは、それぞれの文についての情報価値の評価、つまり談話の中で、中心的なものであるか否かの話し手からのメッセージがないからである。接続助詞ガを用いることによって、情報の価値づけをし、わかりやすくしていると言えるだろう。

また、亀田(1998)では、次の二つの例を挙げ、

⑲昨夜茨城県南部で大きな地震がありました。震源地は××付近と見られます。

⑳昨夜茨城県南部で大きな地震ありましたが、震源地は××付近と見られます。

⑱は第1文、第2文のどちらも話し手にとっては同じ重みをもっているが、⑲は前件が後件の情報に比べて重みが軽く、後件の情報を伝えるための前段階にすぎないと指摘している^㉑。

本稿で見てきたように、接続助詞「が」が後に続く内容に対する制約を持たないこと、そのために後にどんな内容が続くのかを聞き手(読み手)に予測させる機能を果たし得ないことをふまえると、小出(1984)や亀田(1998)の指摘こそが、接続助詞「が」の機能の説明になっているのではないかと思われるのである。

例えば⑭⑮は、⑭'⑮'のように言い換えることができ、論理的な関係を明確にするという接続の機能を考えれば、「が」を用いる必然性はあまり明確ではない。しかし、これを情報の軽重という観点で見れば、「が」を用いる必然性を説明することができる。

⑭⑭'ともに話し手の主張の中心は、「この2作」が「シリーズを通して見ていなくても楽しめる」という点にある。ただし、⑭では「この2作」が「純と蛍の青春編である」ということが、本題とはそれほどかわりのない話題として注釈的に挿入されていることを、聞き手（読み手）に対して、より明確に示している。これは、⑭⑮でも同様である。

つまり、ここでの「が」は本題に入る前の区切りとして機能していると言うことができる。話し手（書き手）にとっては、「が」節は本題に入る前の注釈や確認であり、「が」はその注釈や確認がそこで終わり、いよいよ本題に入ることを示す一種の〈区切り〉の指標として機能しているのではないかと思われるのである。

4-3 冗長になるのを防ぐ「が」

接続助詞「が」の機能を〈区切り〉をとらえると、次のような例もうまく説明できる。

⑳〈幕張サウスコート〉は「アイ ラブ ファミリー」というキャッチコピーによって広告を展開していますが、これを具体的なかたちにするときのキーワードとして「リラックス&セイフティー」を掲げています。（「こんにちは」2002.10）

㉑イギリスの童謡（「マザーグースの歌」）で、

London Bridge is falling down.

という歌の一節があります。二人が両手を高くつないで、その下をほかの人たちがぐるぐると輪になって通って行って、歌が終わったときに、その二人の手が降りるのですが、そのときつかまったらだめ、というゲームのときの歌で、ロンドン橋の人身御供を決めるのが子供の遊びになったとも言われています。（『表現を味わうための日本語文法』森山卓郎 p. 131）

㉒、㉑ともに、

㉑'〈幕張サウスコート〉は「アイ ラブ ファミリー」というキャッチコピーによって広告を展開し（ており／ていて）、これを具体的なかたちにするときのキーワードとして「リラックス&セイフティー」を掲げています。

㉑'二人が両手を高くつないで、その下をほかの人たちがぐるぐると輪になって通って行って、歌が終わったときに、その二人の手が降り（て）、そのときつかまったらだめ、というゲームのときの歌で、ロンドン橋の人身御供を決めるのが子供の遊びになったとも言われています。

のように言い換えることができ、論理的関係を示すという点から見れば、「が」を用いる必然性はそれほど明確ではない。また、⑫⑭⑮の「が」は、本題に入る前の注釈、確認として挿入句のように用いられていたが、⑩、⑪は挿入句とも言えない。

⑩⑪と⑫⑭⑮を比べてみると、情報として伝えている内容にはさほどの違いはない。しかし、⑫⑭⑮が冗長で分かりにくいのに比べ、⑩⑪はそのような冗長さを感じさせない。「が」が冗長な印象を抱かなくさせているのである。

読み手にわかりやすくするための原則として、一つの文に情報が一つになるように、文を短く区切っていく方法がある。しかし、⑩も⑪も二つの文に分けることはなるべく避けたい。とくに、⑩はできるだけ一気に遊び方を説明したい箇所なので、二文以上に分けることは避けたい⁹⁾。そこで、一文一情報の原則を犠牲にして、なおかつ読み手にできるだけわかりやすくする必要が出てくる。それが、接続助詞「が」を用いることなのである。このことは、先に述べた〈区切り〉の機能にも通じる。長い一文の中で、接続助詞「が」を用いていったん区切るのである。読み手はそこで一呼吸おき、それまでに述べられた情報を整理することができる¹⁰⁾。

このように、接続助詞「が」は情報の軽重を示すための区切り以外にも、〈区切り〉として機能していることがわかる。接続助詞「が」の〈区切り〉の機能は、読み手（聞き手）がすんなりと情報を受容できるように、情報にメリハリをつけることと考えることができる。

実際の会話においても、話し手自身が次に何を話すのかきちんと整理できていない場合、接続助詞「が」を頻繁に用いることがある。何をどのような順序で話すのかを整理できていないため、話が冗長になってしまう。そこで、とりあえずの区切りとして「が」を用いるのである。成立した発話として、後から振り返ってみれば「が」の前後の内容に何らかのかかわりを見出すことはできる。しかし、実際の会話では、話し手は後に続く内容とのかかわりを考えながら「が」を用いるのではなく、次に何を話すのかきちんと整理できていないからこそ、とりあえず、ここまで話した内容をいったん止め、次に進むための休止として接続助詞「が」を用いているのである。

従来の研究では、文章や会話として成立した後から振り返って、「が」の前後の内容がどのような関係でつながっているのかをとらえることに重きが置かれすぎていたのではないか。接続助詞であることから、逆接、前置きといったような機能があるにちがいないという先入観が、接続助詞「が」の実際の機能を見えにくくしてしまったように思われる。接続助詞「が」は、後にどのような内容が続くのかを示すのではなく、今まで述べてきた内容をいったん区切りますよという指標として機能している。したがって、前後の内容の論理的関係を整理して用法を分類しても、それは接続助詞「が」の機能をとらえたことにはならないと言える。

接続助詞「が」の用法を、逆接や前置きと分類し、個々の用法について学習しても、学習者の言語に対する認識は深まらないことはすでに述べた。だが、接続助詞「が」を〈区切り〉の指標としてとらえることで、そのような問題点は解決されるのである。

5. 文法学習材としての接続助詞「が」

4.までのところで、接続助詞「が」は、後の内容がどのような論理的関係でつながるのかを示す指標としては機能しないことを明らかにし、接続助詞「が」の機能を〈区切り〉ととらえた。

ここでは、接続助詞「が」の機能を〈区切り〉ととらえることが、文法の学習にも有効であることを述べる。

例えば、接続助詞「が」に逆接、前置きなどの用法があることを知っているだけでは、4.で挙げた②のような例について、接続助詞「が」を用いて一文にまとめてしまうのと、短い文に区切るとどちらがよいかの判断力を養うことはできない。4.では、情報の軽重、冗長さを防ぐという面から、②の「が」の必然性について述べた。したがって、接続助詞「が」の機能を〈区切り〉ととらえることで、上に述べたような判断をする場合の手がかりを得ることができる。ここでは、さらに、聞きやすさの保障という観点からもとらえてみたいと思う⁽⁴⁰⁾。

話し言葉は書かれた文章とは違い、後から振り返って内容を確認することができない。だから、聞き手はできるだけ、効率よく話を聞き、趣旨をとらえようとする。そういう点から、〈区切り〉の指標は聞き手にとって重要である。聞き手は、話の流れがどこで止まり、どこまでがひとまとまりで、話し手は言いたいことをどこで話そうとしているのかを、接続助詞「が」を指標の一つとして探るのである。一文一情報の原則を話し言葉にそのままあてはめると、聞き手は大事な指標を失うことになりかねない。文章に書く場合には必要のない接続助詞「が」でも、話し言葉においては重要な働きを担っている場合が少なくないと考えられるのである。

②の「が」も話し言葉においては指標となり得る「が」である。我々は文章を書く場合にさまざまな文体を用いる。②は話し言葉とは言わないまでも、読み手に話しかけるような文体で書かれている。だからこそ、②では話し言葉ならば接続助詞「が」を用いるであろう箇所に、「が」を用いる必要があったのである。②は文体に適した最も自然な表現が選択されているのである。

このようにして、②は文体の面からも「が」を用いる必然性を指摘することができる。逆に、もっとかしこまった文体で、簡潔で無駄のない表現を目指すのであれば、②のように「が」で一文につなげてしまうことは、適切さに欠けていると判断できるようにもなる。

接続助詞「が」の機能を〈区切り〉ととらえることは、情報の軽重、冗長さを防ぐこと、聞きやすさの保障に基づく文体への意識など、言語の運用のさまざまな面から多角的にかつ柔軟に表現の適否について検討し、その場に適した表現を選択する姿勢を育てることにつながるのである。接続助詞「が」の文法学習材としての優れた面は、このような点に見出すことができる。

中学校の国語科の文法学習においては、接続助詞どころか助詞全般についても、十分な時間を割くことができないのが現状であろう。したがって、接続助詞「が」を文法学習のトピックとして取り上げることなど、あまりにも非現実的であるという批判があるかもしれない。

しかしながら、今見てきたように、接続助詞「が」について学習することは、学習者の言語の運用に関する感覚を養い、育て、学習者の言語生活を豊かにすることにつながる。そして、このことは国語科の目指すべき方向でもあると考える。

6. おわりに

接続助詞「が」の意味・用法は、主に日本語教育の立場からの分析が多く、その成果をそのまま国語教育にあてはめることは難しい。そこで、本稿では国語教育の立場から、接続助詞「が」が会話や文章において、どのような機能を果たしているのかという観点で分析した。その結果、逆接、前置きという用法の判別は、コミュニケーションに大きな影響を与えていないことがわかり、接続助詞「が」の機能を〈区切り〉の指標ととらえることを主張した。この分析によって、接続助詞「が」の文法の学習材としての優れた面もとらえることができた。

ただ、接続助詞「が」の機能を論ずるには、他の接続助詞や接続詞なども視野に入れて考察する必要がある。本稿の考察にはこのような点で欠けている面がまだまだあると思われる。また、今後の文法学習がどうあるべきなのかについて、具体的に論じる必要もある。これらの点については、さらに考察を深め、稿を改めて述べることにしたい。

注

- (1) 三井不動産が自社住宅の宣伝のために毎月発行している情報誌。A4版で170ページ程度。
- (2) 接続助詞「が」の用法を逆接・前置きに大きく分けてとらえる点は、先行研究でも一致している。
- (3) 「けど」と「が」の違いについては明らかでない面が多いが、本稿で論を進めていく上では、永田・大浜(2001)の「けど」についての研究成果を参考にしても、大きな支障はないと考える。
- (4) 文脈がわかるよう、掲出した用例②の前の部分の全体を以下に示す。

穏やかな青い海と折り重なる緑の山々が、独特の景観を生み出している葉山。一角には御用邸もあり、昔から避暑地、保養地として愛されてきた土地柄です。

今回ご紹介する日本料理のお店「音羽楼」は、まさにその葉山御用邸のすぐ近く。オープンが'98年ですが、建物自体は昭和初期の建築。
- (5) ここでは、「が」の文の構成における制約についてのみ考えているため、結論として言わんとしていることが変わることや、内容の真偽についてなどは問題としない。
- (6) 小出(1984)では、もう一つ別の例も挙げられているが、ここでは省略した。
- (7) これらの指摘は、小出(1984)、亀田(1998)においては、接続助詞「が」の機能の本質としてはとらえられていない。
- (8) 遊び方を説明することに主眼があれば、一文一情報が原則であるが、は日本語の「ている」という語について説明するために挙げられた例であり、遊び方の説明に主眼があるわけではない。
- (9) この点については、小出(1984)に「情報の整理」という指摘があるが、これも接続助詞「が」の機能の本質としてはとらえられていない。
- (10) 本稿の筆者は、情報の軽重、冗長さを防ぐ、聞きやすさの保障、はそれぞれが有機的に結

び合って〈区切り〉としての機能を実現していると考えている。したがって、⑳㉑で、接続助詞「が」を用いる必然性も、聞きやすさの保障のためだけでなく、4.で述べたように冗長さを防ぐことためでもあり、また情報の軽重を示すことでもあると考える。これらを総じて、〈区切り〉という一つの機能を果たしているということである。

【参考文献】

- 石黒 圭 (1999) : 「逆接の基本的性格と表現価値」 国語学 198集 国語学会 1999年9月
- 岩澤治美 (1985) : 「逆接の接続詞の用法」 日本語教育 56号 日本語教育学会 1985年7月
- 沖 裕子 (1998) : 「接続詞と接続助詞の「ところで」—「転換」と「逆接」の関係性—」 日本語教育 98号 日本語教育学会 1998年10月
- 亀田千里 (1998) : 「接続助詞「が」の提題用法について」 日本語と日本文学 26号 筑波大学国語国文学会 1998年2月
- 川口容子 (1991) : 「接続表現の機能に関する一考察—ディスコースマーカー「but」, 「でも」の標すもの—」 日本女子大学文学部紀要 41 1991年
- 小出慶一 (1984) : 「接続助詞ガの機能について」 アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要7 1984年6月
- 永田良太・大浜るい子 (2001) : 「接続助詞ケドの用法間の関係について—発話場面に着目して—」 日本語教育 110号 日本語教育学会 2001年7月
- 松本哲洋 (1989) : 「接続助詞「が」の用法に関する一考察」 麗澤大学紀要第49巻 1989年12月
- 渡部 学 (1995) : 「ケレドモ類とシカシ類—逆接の接続助詞と接続詞」 『日本語類義表現の文法(下)』 宮島達夫・仁田義雄編 くろしお出版 P593~P599

* 本稿の用例のうち出典が示されていないものは、本稿筆者の作例である。